

9話 洞窟に蠢くワーム―モルミアの集合生態記録―

「ふう、疲れてきちゃった」

リリアは家に帰る途中である。この日は山岳地帯でモンスター観察をしていたのだった。山肌に自然にできたトンネルを抜ける。天気はさほど良くないが、暗闇から明るさが戻って少し安心した気分になった。

結構な距離の行軍だった。岩山に棲み、その肌に岩を付着させているグラニットというモンスターを調べに行ったのだ。

その通りに肌に岩をつけたトカゲが闊歩しているところを見つけたのはよかったが、このグラニットは大きさがリリアの5倍もある。影に隠れて行動をメモするのみにとどまった。このところモンスターに出会うたびに性的に犯され、排泄行為を繰り返していたリリア。しかし大きさを考えると本能的に、グラニットとの行為は命の危険があると考えて見つからないようにした。

「いつもよりもちよつと薄めのレポートになっちゃうかな」

毎回身体を張ってその生態というか、モンスターの性癖の部分まで調べているリリア。研究者の父親のみならず、彼女のレポートを送った学会からも高い評価を得ていた。新発見

もいくつかしており、今後出る図鑑に彼女の調べた事実が載る予定だという。

そんな新進気鋭の位置に上りつつあるリリアだが、今回のグラニットを調べた内容は自分でも物足りなさが残った。それが少し彼女の心に影を落とす。

「誰にでも書けるような内容だとダメなのよね。やっぱり奥の奥まで調べないと……おあつ！」
石を踏んで転びかけ、慌てて体勢を直す。

ゴツゴツとした石がそこら中に落ちており、日当たりの悪い位置の石には苔が生えていたようだ。ブーツを履いたリリアだが、それを踏んで滑りかけたらしい。

もうすぐ山岳地帯を抜ける。後ろを振り返ったりリリアの目には先ほどまでの山並みが広がっていた。自分の行程を思えば、少しぐらいレポートが物足りなくてもいいかという気分になる。

「あつ、すごい、綺麗」

リリアは岩陰に綺麗な石が落ちているのに気づいた。もうすぐ沈む日の光に当たってきらめいていたのだ。

手で持って拾い上げる。少し重たい透明な結晶だ。表面に少しヌルヌルとするものがへばりついているのが気になった。

「ええと、この色と形は本で読んだような気がするな」

リリアは記憶をたぐり寄せる。さすがに本までフィールドワークに持ってくることはできなかつたので、断片的に覚えている内容を諳んじる。

「あつ、思い出した。群晶だ。そうそう」

一瞬の閃き。リリアは胸のつかえが取れたような気分でにつこりとした。そして改めて手に持った群晶を眺める。結晶の中には、何かがぐねぐねと蠢いているようにも見える。「うん、この何かがくねくね動いてところが特徴的なんだよね。これは確かモルミアっていうワーム型のモンスターが、死んで固まってできた結晶だったはず」

どんどんと特徴を思い出してくる。

「モルミアはバラバラに分かれたり1つにまとまったりできるんだけど、このぐねぐねはモルミアの体を司る群体神経が、本体が死んでからもまだ動いているってことだったよね」
見れば見るほど神秘的である。リリアはいいお土産ができたと思いつつ帰ろうとするが、だんだんとその表情が固くなってきた。

手に持った宝石はモルミアの死骸が元になったものだとすると、表面がヌメヌメとして
いるのは……

「死にたて、ということなの？」

さらにはここにモルミアが生息しているという証ではなからうか。

「あ、あ、あっ」

気づいたときには足を取られていた。リリアの足の周りを何匹ものワームが囲み、巻き付いていた。そして四方から同じような半透明のワームが何匹も押し寄せてくる。そしてワーム同士が触れ合うと、倍ほどに大きな一体へと変わる。合体したのだろうか。

「こ、これがモルミア……」

みるみるうちにワームの何体かが梨里杏の腕ほどの太さと長さを持つ軟体生物へと変化した。

リリアは改めてモルミアの生態を思い返す。

集合体に見えるそれは1つの意思を持ったモンスターである。無数の小さな白から灰色のワームが集まり、ざわざわと蠢いて集まり塊を形成する。その形状は一定せず、四角くも球体にも、流体のようにも姿を変える……そして、知性を持つ。

「いやっ！ やめてえっ！」

立っているリリアの身体を伝って上ってくるモルミア。それを手ではたき落とす。

そして地団駄を踏むような足さばきで踏み潰そうともするが、素早くするりと避けられてしまう。

ストレスと焦りで身体中が汗ばんでくる。

身体を伸縮させる動きでモルミアの歩みは続いていた。

表面は常にうねり、リリアの手によって時折ワームがはたかれて落ちるが、すぐに身体へ群がっていく。

その動きの中で、集合体が声を発するように、無数の「カサカサ」「くちゅくちゅ」という音を響かせる。

「きゃあああつー!!」

上からモルミアが落ちてきた。

洞窟の天井をモルミアが移動してできた粘液の水たまり。その中を何体ものワームが蠢き、リリアの頭上目掛けて忍び寄っていた。

頭に取り取られているうちに、両肩に落ちたモルミアが手首の方へ向かって動く。

そして肘の関節で硬化してしまった。これで獲物は肘を自由に動かせなくなったことになる。

腕を伸ばしたまま抵抗できなくなったリリア。ここからはモンスターのやりたい放題だ。ヌルヌルとした軟体がリリアの乳首をつまみ、絡まり、引っ張り上げる。

「あうっ、あふっ！」

キュイイッ!

ピーナッツ状に勃起してきた乳首を締め上げられた。痛みもあるが乳頭からの刺激の方が強い。

「んんっ!! あうっ、きもちいいっ、だめっ!」

快感のあまり本音が口を突いて出た。

「くっ、ううっ、くうううっ……」

屈辱を感じるリリアだが、事態はのっぴきならないところまで進行している。

スライム状の粘液がリリアの足を覆い、両足部分だけを硬化化されていた。そのために足首から先を動かすこともできなくなった。

それを認識したりリアは、同時にこの先について恐ろしい想像をした。

モルミアが自由にその身体の硬さを変えられるということは、ちょうど股間の下辺りに位置しているモルミアが、上に向かって堅くなって伸びたら……

「きゃふうううっ!!!」

思考が現実化した。リリアのおま○こをモルミアが突き上げてきたのだ。

「やめ、ああっ、んっ! だめ、だってえっ!」

グジュウウウウ!

分泌液とリリアの愛液が潤滑剤となり、モルミアの身体がズズズとリリアの陰部に入

り込む。

「あおおおああおつつ♡♡！！ あぐんんっんうっああっ！！」

ビクビクビクッ！

痛みこそさほどなかったが、固くもない異物が膣壁を蹂躪している。形容しがたい感覚にリリアはよだれを垂らす。

チヨロチヨロと尿道からおしっこが流れ出てきた。

入っているのか出しているのかわからない感覚で、背筋が粟立ちっぱなしだ。

これまでリリアの身体のそこかしこに群がっていたモルミアが、股間へ集う。

リリアが目視しただけでも二〇以上の姿がある。それぞれがウネウネと身体をくねらせながらリリアのおま〇こへ向かってくる。

「やめ、あ、あ……」

1本のモルミアが両足を縛り上げているため、リリアは逃れられない。そういう役割なのだろう。

膝から下をこすり合わせようとするが、そこにリリアの逃げようとする意志を感じ取ったのか、足元のモルミアはさらに締め付けを強くしてきた。

「んうっ！ やめてえっ！」

バランスを崩して倒れてしまう。何体かのワームを潰したような感触が背中にはあった。しかし仲間が潰されて怯むモンスターではなかった。

ヌルヌルとしたワームの身体がいつのまにか横たわるリリアの背中の下を通っていた。何かを挟んで地面と接している。その粘液の感触が気持ち悪く、リリアが背中に力を込めようとしたが押しつぶすことはできない。リリアぐらいの重さではするりと逃れられてしまう。

そして10分が過ぎた。

「ふぐっ、んっ……♡ おぐうつ♡ むむぐうつ♡」

立ったままのリリアの口の中にモルミアが侵入しており、口内から喉を犯していた。

口の奥まで突っ込まれたものは嚙むことができない。唾液が次々とあふれ出してくる。

「あ……♡ はぐおおっ……♡」

両腕が力なくだらんと下がる。リリアはすでに抵抗する力をなくしてしまっていた。ときおり快感で身体がビクッ、ビクッと震える。

服の胸元はモルミアに強引に破られ、今も右の乳首には尺取り虫のように身体を半円に丸めたモルミアが吸い付いている。

今はお留守になっている左乳首は先ほどまで別のモルミアが吸い尽くし、分泌された粘液が塗りたくられている。そそり勃った乳首は肥大化し、性的興奮が覚めやらぬ様子を伺わせていた。

「んぐっ、んうううっ！！」

リリアの口内に入っていたモルミアが、喉奥に向かって分泌液を放出した。味わうことはないが胃に向かって何かが吐き出された感覚があり、リリアはむせる。分泌液を出してそのままモルミアは口からぬるりと抜け出ていく。

「かはうううっ！！ あ！ んあああっ！！！」

ジョバアアッ！

リリアが激しく放尿する。洞窟の中に淫らな排泄音が響いた。

もう何度も繰り返し見られた光景だった。モルミアの分泌液が人間の体内に入ると、なぜかもよおしてくるらしい。

「あひいいっ！！ まだ、でる、でちゃ、うっ！ んううっ♡ ああああっ！！！」

ピュウウウウウッ！

少し腰を落としたリリアが一直線のおしっこを壁に当てる。色が変わった壁にもあぶれていたモルミアが集まっていく。



そして恐ろしいことに気づく。足を伝ってリリアの身体を上ってきているモルミアがいる。しかも何匹も。

ウネウネと動くその身体は観ている分には気色悪いが、すでに分泌液でベトベトになっているリリアの素肌はモルミアの身体がこすれても不快感はなかった。

そして当然のごとくモルミアはリリアのおま○こに到達する。陰唇をかき分けて1匹がそのまま中へ入っていく。

「あつ、ああ、あふううつ♡」

チーーーーッ！

モルミアが入っていくときに膣壁の性感帯をぐねぐねと触っていった。気持ちよくなり、またもリリアは真下に向けてお漏らしする。

水流に負けじとさらに2匹のモルミアが膣への侵入を開始した。

もはや腕を半端に上げただけのリリア。ワームをはね除けるでもなくただただ入っていく感触を頭のどこかで感じているのみだ。

グジュ、ジュオッ！

尿と愛液でぐしょぐしょになったおま○こにすでに3匹が入った。

リリアの膣内はミミズ千匹ならぬワーム3匹である。

「あぐっ、はううああっ！」

刺激が強かった。リリアは倒れそうになり洞窟の壁に手を置いて身体を支える。少し腰を後ろに突き出した。

「ああっ！！」

膣内を蹂躪されていく。置くと手前を同時に刺激される。

噛まれているのか、何かが当たっているのか。

わずかな痛みもあるが、感じる箇所をズリズリと撫でるように触られている。

「か、かふああうっ♡」

排泄欲求が刺激される。異物を出したいが、どうやって出せばいいのかわからない。

リリアの足先が前後に動く。

それに協力する、というわけでもないだろうが、膣内のモルミアたちが一斉に出口に向かって動き始めた。

ズズズッと複数のワームが這い回り、それは川が合流するように一本の奔流となった。やがて一気に局部から脱出された。

そして――

「いあっあっっっ♡♡！！！！！　ぎばちんいい♡♡　いいおおおあっっ♡♡♡！！　いぎゅ

ううづつつうっ♡♡♡♡♡!!!!!!」

ブシャブシャアアアッ!!!!

後ろに向けてとんでもない量の失禁をするリリア。
陣取っていた太いモルミアに黄色い飛沫がかかる。

「おふううううっ……♡!」

そのまま膝から崩れるリリア。

(あたし……このまま、洞窟でワームの餌になるの……?)

涙が溢れる。先ほどまでの快感と排泄の悦びによるものではない。諦念の気持ちから出た涙だった。

ただ、彼女のにじむ視界にはよく映っていなかったが、リリアのおしっこをもらに受けたモルミアが異常な行動を取っていた。自分の身体を何度も洞窟の壁に打ち付け始めたのである。

そしてリリアの足元にいたモルミアに絡みつき、強引に合体していく。みるみるうちにその大きさを増していった。

「え……?」

地面に膝を突いた状態でリリアは巨大化するモルミアの行動を見ていた。

身体の上部をしならせ、頭の部分を洞窟の壁にぶち当て続けている。パラパラと壁面が崩れてきた。全く事態が飲み込めないリリア。

それが何分続いただろうか。ついに壁の上の方に穴が開き、そこから日の光が差ししてきた。洞窟に穴が開いたのだ。どうもモルミアが身体を打ち付けていたのは、薄い部分だったようだ。

日の光が入ったのを見届け、疲れたのかモルミアはその場に横たわる。

「どうということなの？」

当然ながら疑問に思うリリアだったが、脱出のチャンスである。開いた穴の周りを手で広げていく。岩を足元に投げ捨てそれに上りながら土を手でかき分ける。

先ほどまで身体中に群がっていたモルミアも、まとわりつくのをやめてリリアの行動を見ているように思われた。

30分ほどの格闘の末、リリアはついに自分の身体が通れるだけの穴を開けることに成功した。

「出られるんだよね……？」

後ろをチラチラと見る。大小のモルミアも襲ってくるような様子はない。積み上げた石に上りながらそのまま身体全体を出す。

「いたっ」

少しの高さがあったが、怪我をせずに出られた。太陽の高さからすると昼頃だ。洞窟の中で一夜を明かしていたようだった。

洞窟の方を見返すが、何の音もない。一匹の小さなモルミアが、壁を伝って出てきたのか穴から少しだけ顔を出していた。

それを見たリリアは少し笑い、家路を急いだ。

幸い山中で迷うこともなく帰ることができた。

リリアは早速今回の内容をレポートにまとめ、学会に送付した。

2週間後、学会から返信があった。リリアのレポートの細かさを褒める内容だったが、1つ質問も書かれていた。

『レポート拝読いたしました。その中で、モルミアの分泌液が人間の体内に入ること、排泄欲求が刺激されるという報告内容はこれまでに見たことのない新たな発見かと存じます。リリア殿はどのようなにしてそれを知ったのでしょうか』

もったもな疑問である。新発見は新発見だが、どのようなにして発見したのかは記さなければならぬ。

「ど、どう説明しろっていうのよ……」

一人、机の前で頭を抱えるリリアであった。